

せいかつか

SEIKATSUKA EDUCATION

第 3 号
1996

英知を集めた生活科教育研究を

日本生活科教育学会常任理事 嶋野 道弘



平成7年度。生活科の全面実施から4年目です。この間の実践の成果は子供の姿に明かです。生活科の授業では、かつて見たことがないほど子供が生き生きとしています。生活科の時間が今終わったばかりなのに、「先生、今度いつ生活科をするの」と聞く子供がいます。このようなことは、全国の多くの先生が認めるところです。子供が生き生きと活動する。

子供は生活科の時間を待遠しいという。そこには、教育の真実があり、本物があると思われます。

そうした一方で、生活科の授業が画一化、マンネリ化している。実施当初のような特色ある授業が見られない。そういう指摘もあります。憂慮すべきことです。授業が画一化、マンネリ化しているというのは、実践を評価し、その評価を生かした授業の改善が疎かになっていることを意味するからです。低学年の育ちざかりの子供は、一日として同じではありません。変化の激しい社会の中で、地域の様子も刻々と変わっています。また、授業をして、ああすればよかった、と悔やまれることも多いと思います。そういうことに積極的に対応してこそ、生活科の授業が確かなものになります。

多くの実践が生まれた今日、生活科教育の充実と発展に当たって、次の二つが大切なように思われます。

その一つは、生き生きと楽しく活動する子供についての研究です。子供には、子供がおのずから学び・育つ筋道があるように思われます。そうした世界を理解しようともせず、「ただ生き生きと楽しいだけではだめだ」というのでは、大人（教師）の流儀を押し付けることになります。子供らしさの発揮のしようもありません。

二つに、指導計画や授業について、計画、実践、評価を着実に行うことです。それは実践を大切にすることです。特色ある、というのは、奇抜であったり他に類がないことを意味するものではありません。実践を大切にすることの結果としてあるものと考えます。

幸いなことに生活科教育学会の会員構成は、教師、研究者、行政関係者、マスコミ関係者など多彩です。積極的な交流を図ることによって、それぞれの立場を生かした教育研究が可能です。生活科教育の充実と発展のため、本誌を通して会員皆様の英知が結集されることを願うものです。

目 次

英知を集めた生活科教育研究を	嶋野道弘	1
----------------------	------	---

特集Ⅰ 私の授業づくり

◆自己や他に働きかけ活動を広げ深めていく子	左合 悟	4
——個のよさが輝き可能性がめぶいた「パッチンおもちゃランド」		
◆よさの輝きや可能性のめぶきは、本人にもどされて発展し本物になる	小林毅夫	12
◆“遊び”を中核に据えた単元の開発	高橋健一	15
——フリー学習・活動との関連を図った活動の展開		
◆「子供本来の姿」を生活科の学習に求める——高橋先生の実践から学ぶ	井戸紀子	23
◆自分らしさをお互いの中で生かすことのできる子供たち	渡部万美江	26
——場面におけるエピソードの累積・分析を通して		
◆生活科における実践的研究の変容を求めて——渡部論文の示唆するもの	戸田善治	34

特集Ⅱ これからの生活科を考える

◆教室の新たな知の構築をめざして——生活科授業改善に向かう視点	溝辺和成	37
◆生活科実践の課題と方向	片上宗二	42

私の生活科像

■生活科と子どもたち——生活科を学んだ息子のたのもしさ	山本もり	47
■家庭に広がる生活科	須藤紀子	49
■遊ぶ心・学び合う心	竹澤靖浩	51
■「生活科」について思うこと	宮下三枝子	53

自由稿

■ミドル・スクールのカリキュラム編成における「統合化」の試みについて	高浦勝義	55
■生活科の学力と授業構成——コンピテンスを中核として	加藤寿朗	62
■個別の感覚を用いて感性を育成し、自然認識と環境教育の基盤を育てる	湊 秋作	68

私の地域の生活科

■北国発の生活科をめざして——北海道生活科教育連盟の活動	横 藤 雅 人	74
■生活科を生活化に——その土地くさを求めて	成 田 宏 子	80
■「子供の姿で語ろう。」をスローガンに	松 本 謙 一	85
——富山県小学校教育研究会生活科部会		
■あったか高地の生活科	村上あかね	89
■鹿児島県：「あしたをひらく心豊かな人づくり・文化づくり」の	成 見 和 總	95
素地づくりをすすめるために		
・ 日本生活科教育学会会則		100
・ 学会だより		101
・ 機関誌編集委員会投稿及び編集規定		103
・ 編集後記		103

